

10世紀～13世紀前半における日麗関係史の諸問題

—日本語による研究成果を中心に—

森平雅彦*

1. 全般的状況
2. 新羅商人と新羅海賊の実体:9世紀
3. 初期の“冷たい”関係:10世紀～11世紀前半
4. 交易の活況と九州在地社会・高麗王権:11世紀後半
5. 通交記録の減少とその実態:12世紀
6. 進奉貿易と初期倭寇:13世紀前半
7. 課題と展望

1. 全般的状況

日本において日麗関係史に関わる研究は、明治期にさかのぼる長い歴史を有する。しかし古代や朝鮮時代の日朝関係史研究とくらべ、およそ不活発である。なかでも、元・高麗軍の日本侵略(朝鮮史上の甲戌・辛巳の役¹、日本史上の文永・弘安の役)や前期倭寇にいろどられた13世紀後半以降に比して、本稿で対象とする13世紀前半以前については、実に寥々たる有様である。しかもその大半は日本史分野の研究者による業績であり、朝鮮史分野の研究者による成果はごくわずかにすぎない。そのため、対日関係が当時の高麗社会においていかなる歴史的意義を有するのかという点については、多くの部分が未解明ないし未検討であり、そのことは日麗関係史の体系的理解に大きな障碍となっている。また日本史分野での研究にしても専論は少なく、断片的な論及や概説的な叙述にとどまるケース、あるいは、日本の対外交渉史を論じるなかで日宋関係に対し付随的にあつかわれるケースが大半を占める。

このように、研究が量的にも質的にも不足している理由としては、他の時代にくらべて顕著な国家的事件にとぼしく、史料も不足することから、なかなか注目されにくいこと、また現状では、日本に高麗史

* 九州大学大学院人文科学研究院准教授

¹ 1274・81年の対日戦役に関する朝鮮史上の呼称について、日韓両国の学界では定まった用語がないとおもわれるが、筆者は『高麗史』卷31・忠烈王世家・20年(1294)正月癸酉の「甲戌辛巳兩年之役」という記載にもとづく用語を用いている[森平2009]。

研究者が少ないこと、などをあげることができよう。もっとも韓国の歴史学界においても、日麗関係史、とりわけ13世紀前半以前のそれは、もっとも低調な研究分野のひとつである。

ただ日本の対外関係史研究において一国史観の克服が志向され、海域史・海域交流史の視点が深まることにより、1990年代以降、日麗関係史研究にも新たな機運が生まれつつある。そして、それに刺激されながら、韓国でも新たな業績が生まれているが、近年では日本の日本史研究者の側でも海外の成果を積極的に吸収するようになってきた。また、こうした研鑽をささえる地道な基礎作業として、種々の資料集[石井・川越1996; 対外関係史総合年表編集委員会1999; 張2004; 武田2005; 김기섭他2005; 金2006]が日韓であいついで刊行されたことも、おおいに重視されねばならない。とりわけ、対外関係史総合年表編集委員会[1999]、張東翼[2004]、김기섭ら[2005]の仕事は、朝鮮史研究者に対して日本史料の積極的利用の道をひらいた点で、画期的な意味がある。

以下、本稿では、日本語により公表された成果を中心として、10世紀～13世紀前半の日麗関係史に関する研究状況と論点の所在を確認していきたい。ただし必ずしも専論ではない著述の断片的または概説的な言及が検討対象の大半を占める関係上、時系列にそって研究動向を整理することに積極的な意味はあまりない。そこで、主要な論点ごとに研究状況を概観する形をとることになる。

なお本文中に記す研究業績の刊行年は、いずれも最新の収載先にもとづいている。初出年と大きく異なり、研究の時間的な流れを理解するうえで混乱をあたえるかもしれないが、初出後に大幅に改訂され、最終稿により参照されねばならないものも少なくないので、便宜的にこのような方式に統一した。初出情報については末尾の文献一覧を適宜参照されたい。

2. 新羅商人と新羅海賊の実体：9世紀

日麗関係の歴史的性格を探るうえでは、その前提のひとつとして、9世紀における新羅商人と新羅海賊の実体に関する議論をふりかえっておく必要がある。

周知のとおり、8世紀に新羅と日本の外交関係が冷却化するのといれかわるように、9世紀には新羅商人が大宰府など西日本の沿岸地域を訪れるようになる。清海鎮(現・韓国全羅南道莞島)や赤山(現・中国山東省石島)を拠点に唐—新羅—日本間の海上交通に大きな影響力をふるった張保臯(張寶高・弓福)は、その代表的な人物である。こうした新羅商人の出自や実体について、研究の初期段階において森克己[1975b; 2009h]は、新羅中央の混乱に乗じて勢力を蓄えた地方官や豪族の貿易船としている。しかしその後、研究が進展するにつれて、彼らは新羅国内の勢力というよりも、当時の社会混乱のなかで唐に流出ないし進出した人々が主な担い手だったと説明されるようになる[石井1988; 山崎2001bなど]。ただしその活動は新羅国内の経済ともリンクしており[山崎2001b]、朝鮮半島西南部の海民勢力との関係も注意される[李炳魯1993; 李成市1997]。新羅の域内勢力と域外勢力の関係をどのように理解するかは、今後さらに追究すべき課題であろう。少なくとも、日麗関係の史的観点からは、仮に脇役だったとしても、新羅国内に主な生活基盤をおく人々が対日貿易にいかに関与したのかという点は重要である。なお山崎雅稔[2001a]は、当時の日麗貿易を「清海鎮—鴻臚館貿易」と

規定し、交易の成立要件として、唐社会とつながった張保臯という一個人の特殊性に注目している。

その保臯が新羅王権と対立して841年に殺害されると、混乱の波及を警戒した日本政府は、大宰府鴻臚館を舞台とする貿易から新羅商人をしめだし、これにかわって唐商人が進出してくる。そこで新羅商人は新たな販路を開拓するか、場合により海賊に転身したと考えられることになるが[山崎2001b]、生田滋[1991]は、このころ山陰や北陸に姿をみせた新羅商人について、鴻臚館貿易から排除された新羅商人の活動ととらえる。ただし唐商人と称される者のなかには在唐新羅人が含まれており、日本側もそのことは認識しているため、排除対象はあくまで本国の新羅人だったとみられる[山崎2001a; 渡邊2003; 榎本2007b]。しかし前述のごとく、張保臯配下における新羅国内の商業勢力の実体がいまひとつ不分明な現状では、蒲生京子[1979]がその先駆的な保臯研究で述べたように、保臯とその後の海上勢力の系譜関係は必ずしも明瞭ではないという慎重な姿勢も尊重すべきである。なお榎本[2007b]は、新羅商人の消滅について、高麗の誕生にともなう集権化の影響を指摘するが、高麗初期の“非集権的”な統治状況からみて、ただちには同意できない。

9世紀に日本沿岸を襲った新羅海賊について、かつて森克己[1975ab; 2009a]は、地方政治の混乱に乗じた新羅の地方官や「不逞新羅人」の活動などと概括的に説明した。しかし大局的には地方社会の混乱に起因するとしても、時期的な様相変化に注意する必要がある。9世紀はじめに対馬や小近嶋を脅かした新羅海賊は、張保臯登場の背景ともなった新羅の飢饉や治安悪化に起因するとみられる一方[生田1991]、保臯殺害後の比較的近い時期の海賊事件は、鴻臚館貿易から排除された新羅商人[生田1991; 山崎2001b]や、権力の統制からはずれた群小勢力[渡邊2003]の動向を考慮する必要がある。さらに9世紀末の海賊事件については、新羅王権が関与した可能性を否定できないとする見解もあり[濱田2002]、生田滋[1991]は、新羅政府が自ら「海賊の大親分」になったと評する。しかし石井正敏[2001]は、関係史料を吟味してこれを否定し、新羅政府の苛斂誅求にたえかねた民衆の活動とみる。さらに山内晋次[2003b]は、石井の史料解釈に疑問を呈しながら、新羅王権を海賊の主体とみる見方にも否定的な立場を示し、当時台頭してきた地方豪族の関与を推測する。

地方豪族の対外活動については、後三国の立役者である王建や甄萱のみならず、晋州地方の王逢規が10世紀初めに対中通航を行った例もある。日本における新羅商人・新羅海賊の活動が新羅末・高麗初の豪族といかなる関係を有するかはなお未解明だが、後述のように初期の日麗通航の性格を考えるうえで、すこぶる重要な意味をもつ。

3. 初期の“冷たい”関係：10世紀～11世紀前半

10世紀はじめ、建国後いくばくもない高麗と後百済は活発な対外通航を展開したが、このときの対日交渉については青山公亮[1955a]と中村栄孝[1965]の先駆的研究がある。両氏は高麗の対日遣使を937年と939年の2回としたが、現在では940年にも行われたとみられている[石上1982; 森克己2009h]。

これらの対日通航は後百済や高麗の「朝貢」の申し出を日本側が拒絶したことで挫折し、その後、政府レベルの定常的な通航関係はついに成立しなかった。従来このことは、平安時代の日本外交の開

鎖性を表すものとみなされてきたが、石上英一[1982]は、それが周辺世界に対する無知・無関心に起因するというより、朝鮮半島の混乱・動揺が国内に波及することを防ぐための意図的な孤立政策だったととらえる。当時の日本の外交対応を公文書の授受という観点から分析した渡邊誠[2007]も、日本側が周辺国からのアプローチに対して無視・黙殺ではなく、しかるべく対応(文書の返信)していたことを強調する。石上説は、日本側の歛心を買得る「朝貢」という通交者の姿勢にも関わらず、日本が通交を拒絶したことからも補強されるが、これに対して南基鶴[2003]は、「朝貢」といった史料表現が日本側の造作にかかるものであり、実際には日本の立場と抵触する高麗側の大国意識が顕れていたのではないかと推測する。

一方で、当時の日本が高麗を新羅の後継国と認識し、新羅との外交摩擦と海賊被害の経験より発する「敵国」意識を高麗にむけていたことも事実である。森公章[2008]は、日本が高麗との関係形成に慎重な態度を示した背景として、9世紀後半以降の朝鮮半島社会の混乱に加え、新羅海賊の影響を指摘する。過去の記憶と、同時代の情勢に対する認識とが、複合的に日本の外交対応を規定していたというわけである。そこで、このような観念と現実の複合作用をいかに読み解くかが、日本側の外交対応を理解するうえで鍵となる。

たとえば石井正敏[2000]は、997年の高麗牒状に対する猜疑心に満ちた日本側の対応、さらには高麗海賊誤報事件について検討し、敵国意識の影響を認めながらも、当時朝鮮半島を襲ったと推定される日本海賊の行為に対して高麗側が報復するかも知れないという現実の懸念があった可能性を指摘する。またこの事件について、渡邊誠[2007]は、当時契丹の冊封をうけた高麗にとって、日本に友好関係を求める意味が薄れ、海賊問題に対して高圧的な態度にでたためではないかと推測している。そして日本が通交拒絶にあたって文書の不備や自国の尊厳をもちだすのは、相手から侮蔑されまいとする意識、すなわち自国の弱体に対する心理的不安とそれをみすかされまいとする虚勢であり、敵国意識とはこれと表裏する現象であるにとらえる。

ただし997年の高麗牒状事件をめぐる国際状況については、当時の高麗と契丹は形式上の宗属関係とは裏腹に、いまだ対立局面にあったとみるのが適切であろう。高麗政府がこのタイミングで対日交渉を試みたのであれば、関係悪化は好ましくなかったはずであり、契丹対策を念頭においた連繫を模索した可能性すら考えられなくもない。文書に表れた高麗側の大国意識を日本側が自身に対する侮辱と受けとめたとしても[南2003]、文書には鄭重の意を表す書簡形式である啓を採用した疑いもあるので[森平2009]、日本に対する優位意識を単純に誇示していたとはかぎらない。

なお上川通夫[2007]は、この時期の日本の天台における日本優位意識を分析して、日本側が呉越の天台復興の実質的貢献者である高麗ではなく、宋の天台にこだわることに注目する。そして、高麗への政治的対抗心などから、高麗を黙殺した仏教三国思想と、やがてこれにもとづく仏教的世界認識—インドを射程にふくめて高麗を黙殺しつつ中国を相対視する—が形成されたとする。

972年には高麗の南原府・金海府からの遣使記録が日本側に残るが、これを地方官の行為[石井1987]とみるのは必ずしも適当ではない。当時高麗では地方官の派遣がはじまっておらず、当該地域を実効支配する豪族の自主的通交である可能性がある[森平2008]。この点において、かつての豪族の対外活動との連続性が注意される。確証があるわけではないが、中央政府による辺境統制が弱かつ

た当時、地方豪族が独自に對外活動を行う意欲と、これを可能にする環境がなおも残されていた疑いがあるのである。したがって、高麗が後三国を統一したのち、朝鮮半島の地方勢力による自主的對外活動がほとんど目につかなくなるとすれば、それは中央政府の統制というより、彼らの求める利益が高麗政府の統治下で、また別の形で実現されていた可能性を考えてみる必要がある。そこで、かつて豪族の對外通交が一定の範囲で行われていたとして、彼らはそこに何を求めたのか、そして初期の高麗政府が主催する對外通交が国内社会に何をもたらしたのかが重要になる。

担い手は不分明ながら、当時、高麗と日本の中で交易が続いていたことは、高麗の物品を調達するために九州に下向した高麗国交易使の存在からも指摘される[石上1982; 森克己2009h]。前述した997年の高麗牒状をめぐるやりとりのなかでも、両国を往来する商人の存在がうかがわれる。また「撰津勝尾寺縁起」には正暦元年(990)に「百済国皇后」の委託により観音像を奉納した宋の海商周文徳・楊仁紹の逸話がみえる。これが史実ならば、宋商を介した日麗通交が10世紀に行われたことになる。しかし原美和子[2002]によると、この説話にみえる宋商は実在の人物だが、説話自体は勸進興行や周辺住民とのトラブルを收拾する方便として、長谷寺の観音靈驗譚一異域からきた仏像が靈力を発揮する一をもとに、13世紀半ばころ創出されたフィクションだという。そうだとすれば、この説話を10世紀の日麗通交の実例にあげることはできないことになる。ただし高麗など異域の珍寶を宋商がもたらすというモチーフが実際の歴史状況を下敷きにしている可能性は、必ずしも排除できないだろう。

11世紀はじめに九州を襲った刀伊(女真海賊)事件は、両国関係の一転機とされる。高麗水軍による日本人捕虜の救出と送還の過程については池内宏[1934; 1979]と森克己[2009h]の論考がある。また近年、石井正敏[2006]は、女真の捕虜となった日本人女性の供述記録にもとづき、高麗兵船の構造を分析した。この事件の歴史的意義について森克己[1975ab; 2008; 2009gh]は、高麗側の鄭重な対応が日本の対高麗姿勢の軟化をみちびき、その後のさかんな漂民送還と通商の契機になったとする。しかし村井章介[1996]はこの事件をめぐる日本側の高麗の軍事力に対する関心に注目し、高麗への依然とした猜疑心、「敵国」新羅と結びつける認識、平安貴族の国際感覚の退嬰性と閉鎖性を再強調している。石井正敏[2000]も、日本における高麗に対する警戒心は刀伊事件後も変化せず、中央・地方を問わず貴族層の基本的な認識だったと述べる。その意味では、刀伊事件をめぐる両国の交渉が表面上友好的に処理されたにも関わらず、政府間の公的な外交関係へと発展しなかったことが、むしろ重要であろう[森公章2008]。また高麗側の友好姿勢も、契丹との抗争を背景とする方便であった可能性がある[南2003]。ただ山内晋次[2003a]が指摘するように、日本側の優位意識と警戒感は消えなかったものの、新羅に対する場合のように極端な敵視や紛争事項は生じなかった点が特徴といえる。

4. 交易の活況と九州在地社会・高麗王権：11世紀後半

高麗史料において、日本からの通交者は11世紀後半ににわかには顕在化し[青山1955b]、12世紀に入るとまた急速に姿を消す。このことについて、日本・宋・高麗の貿易関係を先駆的に研究した森克己

[1975ac;2008;2009abcdfg]は、成長してきた日本の商人が当時は自力での中国渡航に技術的な困難があったため、まず高麗に進出したものとみた。これは12世紀に入ると中国史料に「日本」商人の渡来が確認されるようになることを念頭においている。高麗に渡航した日本側通交者の出自については、この時期、大宰府の貿易管理体制が瓦解し、荘園を舞台に日宋間の密貿易が行われるようになったとの自説を前提として、九州の荘園関係者や大宰府・博多の商人が海外貿易にのりだしたものであり[森克己1975abc;2008;2009cdfg]²、それら個々の通交者による私的な物品献上(私献)の形式により貿易が行われたととらえる[森克己1975b]。そして、日本側が高麗産品におとらず宋より渡来した産品の間接輸入を重視したとして注目し[森克己2008;2009e]、宋の錦が高麗を経由して日本に渡り、日本の水銀・螺鈿・硫黄等が高麗より宋へ流れ、日本の水銀が宋より高麗へもたらされるといった物流の三国連鎖関係を指摘している[森克己2008;2009g]。

しかし森の見解には疑問も示されている。まず荘園内密貿易説については、11世紀段階では大宰府の貿易管理が機能していたとの指摘がある[山内2003c]。荘園の対外交主体としての力量については見方がわかるが、少なくとも独自に海外に進出する能力については慎重に評価する必要がある。また当時の日宋貿易は宋の海商が主導しており、それゆえ12世紀以降の中国史料に「日本」商人が現れることは力関係の変化を示すものとして注目されたのだが、榎本渉[2007a]は、この「日本」商人の実体は宋商であり、宋商が日宋貿易を主導する状況は12世紀にもかかわらないとする。そうだとすると、11世紀の日麗通交を12世紀の日宋貿易の前段階として単純に位置づけることはできなくなる。

日本側が高麗貿易に中国産品の間接輸入を期待したという点も、わずかな判明事例から状況を過大に評価しないように注意したい。稲葉岩吉[1934]があげた茶や薬種をはじめ、高麗在来の多様な物産が東伝した可能性にも、いっそう細かく目配りしてゆくべきだろう。一方、日本側の輸出品について、三浦圭一[1993]は、高級工芸品の存在に注目し、朝貢形式をとる交易が大宰府体制の一環として推進されたとする。そして、その生産の場も大宰府とその周辺にみだし、それが高麗美術にあたえた影響も指摘する。

貿易の形式については、日本側の「私献」という点をあげるだけでは交易の政治的意味が看過されるという山内晋次[2003d]の批判がある。山内は、当時の日本・東南アジア・高麗の状況を対比させながら、政治権力と国際貿易の関係に着目した。そこでは、政治権力による貿易港(礼成港・博多など)と商人に対する管理・統制、進貢形式をとる物品取引が権力側の自己中心的な世界観・対外姿勢を装飾し、ささえていたこと、また商人の政治・外交上の役割(文書・情報の伝達、使節の搭載、注文品の調達、国家儀礼への参加)など、交易活動に付随する政治的側面が指摘された。

山内の議論の前提のひとつに、奥村周司[1979;1982]が指摘した「八関会的秩序」がある。高麗の国家的祭礼である八関会の国王朝賀儀礼には、宋商・女真・耽羅など異域の人々が参列し、高麗王を中心とする王権秩序が表現されたが、11世紀後半にはそこに日本からの通交者が参加したケースもあり、奥村は、高麗の立場からは日本もまたかかる政治秩序に包摂される存在であったと指摘した。さらに奥村[1985]は、高麗文宗朝における日本への医師招請事件を検討し、日本に対する高麗の大国

² ただし森克己2008の段階では日麗貿易の主体として九州の地方官吏についても言及している。

意識が外交文書の形式・内容に現れているとする。そしてこの対日通交が失敗したことにともない、日本との関係が再認識され、この後に成立した八関会の儀注には日本が朝賀礼の参加者として登録されなかった可能性を指摘した。奥村の研究は、高麗史研究の立場から対日関係の歴史的意義をとらえた数少ない論考として貴重である。

たしかに高麗は君主を天子・皇帝に擬するなど、自尊の姿勢が朝鮮歴代王朝のなかでも突出した存在であった。しかし盧明鎬[1997;1999]によれば、その世界観は複数の天下の並存を想定する「多元的天下観」が主流であったという。そうだとすれば、自国を天子国・皇帝国に擬する自尊意識がただちに日本に対する優越意識につながるとはかぎらないことになる。少なくとも、個別の通交者に対する姿勢が、その背景にある政権・民族全体におよぼされるとはかぎらない[森平2007]。

なお上記の医師招請事件については、田島公[1991]が顛末を紹介しており、その際の大江匡房の返書起草をめぐるのは、文学史の立場から小峯和明[2006a]が論じている。また日本側が文書形式の不備を理由に医師招請を拒絶したことについては、かつて青山公亮[1955a]が「徹底した不干渉主義」と評したように、日本外交の閉鎖性と硬直性を表すものととらえられてきたが、前述のごとく渡邊誠[2007]は、表向き・形式上の拒絶理由にすぎないとみている。いずれにせよ、ここで重視すべきは、交易を通じた往来の活況と、国家間の定常的な外交関係の不在という2つの局面が併存した点であろう[森公章2008]。

なお田村洋幸[1993]は、日本からの通交者は、朝鮮時代における書契のごとき書状を携えていたと推測しているが、この点は日本側の通交主体と通交形態に関わる重要な問題である。

その通交主体について、山内晋次[2003a]は、対馬・壱岐や九州北部地域の在庁官人層(在地豪族の出身で官衙の貿易管理機構に携わりながら自らも貿易に関与)や府官・在庁官人と結びついた商人を想定しているが、そのなかで注目されるのが宋商の存在である。日宋貿易では、これを主導する漢人海商の活動が鴻臚館を舞台とする「波打ち際」貿易から博多など日本側現地に拠点構えて長期滞在する「住蕃」貿易に進展したことが指摘されるが、上記の医師招請事件でも両国を仲介する王則貞なる「日本」商人が登場する。この人物は、太宰府観世音寺の十一面観音像墨書銘に「府老」として名を残す王則宗の一族と考えられ[門田見1985]、中国系の一族が土着化して大宰府やその周辺の権力機構に食い込み、かつ対外貿易に従事していた様相を示すものと考えられる[亀井1995;山内2003a]。

このような中国系商人が日麗貿易にも進出していたわけである。その重要性はつとに田村洋幸[1993]も言及しているが、原美和子[1999;2006]は、日本に拠点を有する漢人海商が日宋貿易のかたわら日麗交易にも進出したものとみている。かつて森克己[2009e]は、日宋貿易と麗宋貿易をになった宋商は別個に専門化していたと分析したが、原は、機会があれば商圏を拡大していく海商の動きと、それを可能にするネットワークが存在したとみている。また義天版の高麗仏典の日本輸入を宋商が仲介したことにも注目し、仏典のごとき貴重品の輸入や外交文書の伝達のような特殊な局面では、宋商が優位な情報収集・伝達能力とネットワークを有していたという貿易活動の階層性を指摘した。

日麗通交の経路について、山内晋次[2003a]は、貿易の盛行と表裏して官庁を通じた漂流民の送還がさかんに行われたことに注目し、大宰府—対馬ラインが窓口となって金州への送還が行われ、高

麗では金州の東南海船兵都部署により中央にとりつがれたことを指摘した。この東南海船兵都部署は12世紀には慶尚道按察使へと改編されるが、対日窓口の機能はこれに継承されてゆくらしい[近藤2009]。今後は、日本との交易や外交折衝における金州や東南海船兵都部署(慶尚道按察使)の場所的性格について、近年活発に展開されている世界各地の港市論の成果をふまえつつ、また朝鮮前期の三浦形成の前史という点を意識しながら、本格的に検討をくわえる必要があるだろう。

ところで、漂流民の送還や交易をめぐる日麗間の主要な接点として浮上するのが対馬である。山内[2003a]も、対馬と高麗との間で頻繁・密接な人的交流が行われたことに注意しているが、日本側史料には、当時高麗と交易したのはもっぱら対馬島人だったとする記載もある。そこで佐伯弘次[1990]は、日麗貿易の主要な担い手として対馬に注目し、土地の物産を中心とする交易形態を指摘するが、さらに小峯和明[2006b]は、当時の対馬での銀採掘に高麗の人夫が関与した可能性も考慮している。これは先述した高麗に対する高級工芸品の輸出という図式とは異なる内容だが、田村洋幸[1993]は、博多地域の商人は高級二次製品、対馬の人々が海産物など現地の一次産品を輸出するという、地域性をともなった階層構造を想定している。前述した原美和子の議論を援用するならば、前者についてはさらに、広域国際ネットワークをもつ宋商とそれ以外の商業従事者のちがいを考える必要もあろう。

仏教交流については義天の統藏経を中心とする高麗仏典の日本将来が注目され、大屋徳城[1988ab]の基礎的調査がある。日麗関係史上の論点としては森克己[2008;2009g]も先駆的に言及しているが、その歴史的意義について堀池春峯[1980]は、大陸仏教の新知見を得て教学の進展をはかろうとする日本仏教の動向にからめた国際的な視点を提示している。上川通夫[2007]はこれを深め、院政期における遼仏教の参照にもとづく真言密教重視政策につながるものと指摘する。さらに横内裕人[2008a]は、統藏経将来事業の担い手を詳細に分析し、南都系密教と新華嚴の展開に関わり、撰関家中心の日宋仏教交流とは異なる対外パイプを求める院権力の意図を指摘する。そしてそれが海商・大宰府を介したモノのみの交流であり、鎌倉仏教における顕密体制成立の伏流水になるとした³。また両氏の研究をふまえた保立道久[2004]は、院政期の宗教イデオロギーの国際的性格をより巨視的な観点から考察し、統藏経の奉請が、撰関政治期の対外関係が院権力を中心に再編される過程—金の勃興にともなう東アジア国際秩序再編のなかで平安京と大宰府をより直接に統括する体制が構築される—で生じた現象であり、平氏政権の登場とその後の動乱につながる歴史的前提のひとつとする。

上に述べた仏教交流は院権力や宋商など、主として社会の上位層に主導された動向だが、稲葉岩吉[1934]が紹介した『法華靈験伝』の東伝説話—巨済島の供辯より倭僧が譲り受け博多崇福寺にもたらした—のごとく、対馬海峡沿岸地域のローカルな動きもみおとしてはなるまい。

一方、高麗側から商人等が来日する動きは史料的にはきわめて微弱である。これに関連して森克己[1975b]は、高麗の中央集権的な官僚国家機構のもとでは地方官がその地位を利用して貿易に投資し、あるいは自立した地方権力が独自に貿易活動を行う余地はないこと。貨幣経済未発達のため民間商人が海外に乗り出す段階ではないこと。宋・日本・大食より船が頻繁に来航するため高麗民間商人

³ なお、日本中世仏教の成立と東アジア国際環境の関係性に関する研究動向については、横内2008bを参照。

が必要とされないこと、などをあげている。これに対して朝鮮史研究の側では、麗宋貿易における高麗商人の活躍がいわれてもきたのだが、かかる通説は李鎮漢[2005]や榎本渉[2007a]によって見直しを余儀なくされている。ただし朝鮮時代にくらべて高麗の中央集権度は低く、地方社会の自律性が相対的に高かったため、少なくとも森の指摘する一番目の要因は、高麗商人の存在感の小ささを説明する理由として、必ずしも適当ではないだろう。

5. 通交記録の減少とその実態：12世紀

12世紀に入ると日麗間の通交を示す史料は急減する。青山公亮[1955b]は、かかる関係記事の繁閑は事実の有無そのものを意味しないが、傾向性を反映すると評価する。その日本側の要因について、森克己[1975ac; 2009acfg]は、日本商人が高麗の政治混乱にともなう危険をさげ、技術的に可能となった対宋進出に転換したものとみた。田村洋幸[1993]も高麗内外の動揺をあげる。また森克己[1975ad]は、そもそも高麗貿易が薄利である点をあげているが、三浦圭一[1993]も日宋貿易の発展による利潤バランスの変化を指摘する。高麗側の要因についても、双方の経済格差を懸念した高麗政府が貿易を縮小したとの見解がある[田村1967]。

こうした見方に対して李領[1999a]は、高麗の対宋貿易は持続していることより、高麗国内の“乱れ”が対日貿易衰退の直接的要因にはなり得ないとする。そして、当時、女真の台頭により北辺情勢が不安定になるなか、1093年に日本・宋両国の不審船が王都近海に出現した事件(李は日遼貿易船と推定)を契機として日本商客の上京が禁じられ、さらには1079年の医師招請交渉のこじれから対日関係が重視されなくなったことも重なり、日本からの来航者に対しては金州での応接にとどめる消極方針に転換したのではないかと推測する。その結果、貿易不振のため日本からの渡航数も減少したであろうが、辺境での出来事であるために史料が残りにくくなる点を考慮すべきで、史料上の状況が実態とはかぎらないとする。そして、当時の日麗通交を証明する資料として、朝鮮半島の仏塔内に高麗時代の遺物とともに収められていた南海産のイモ貝と、11・12世紀の日本の瓦当紋様における高麗の影響をあげる。

李の見解に対して濱中昇[2000]は、高麗国内の混乱が日麗貿易衰退の直接原因とはならないことに同意しつつも、李のあげた考古資料については、当該期の日麗貿易の物証とは断定できないことを指摘し、通説をくつがえすには論証不足とする。また橋本雄[2002]も、接触の場が金州にかぎられることが記録の減少につながるか、疑問を呈している。実際、11世紀における日本からの来航者情報は、しばしば中央政府に対して金州から送られた報告という形で記録されている。また「日本」商客の上京が禁じられたという明証もない。

なお李領は、当時日麗通交が途絶していなかったことを論じる一環として、朝鮮半島や耽羅が日宋通交の航路において重要な位置を占めており⁴、日麗通交の事実がその背景にあるとしている。これに

⁴ 日宋交通における耽羅の位置については、森克己[2009f]が先駆的に論じている。

対して濱中昇[2000]や橋本雄[2002]は、関係史料の読解に疑問を呈する。また関連して榎本渉[2008]は、日本僧の渡宋記録にみえる高麗関係記事に着目し、高麗がもっぱら漂流・海難の場としてイメージされていることを指摘している。

このように前代に比して規模が縮小したとの印象はなお払拭されないが、李領が指摘するように、それがあくまで記録上の見え方の問題であることには、やはり注意が必要である。12世紀後半の源平抗争のなかで藤原親光が対馬から高麗に亡命したという逸話があるが、川添昭二[1988]は、11世紀以来つづく対馬と高麗の密接な関係が背景にあるととらえる。13世紀前半の史料には朝鮮半島南岸において対馬島人が高麗政府の統制の枠外で活動していたことをうかがわせる内容もみえる。政府記録に残りにくい地方・民間レベルの通交は、それ以前から続いてきたのかもしれない。少なくとも、12世紀半ば(高麗毅宗朝)の段階で、日本からの通交者は依然として高麗王権の自尊意識を満足させる来貢者として存在しており、このことは後述する進奉貿易の問題とからんで李領[1999b]も注目する⁵。また、こうした交流を通じて平清盛の福原別荘の造営に高麗の都城プランが影響をあたえた可能性も推測されている[高橋2007]。

6. 進奉貿易と初期倭寇：13世紀前半

13世紀前半には日本からの通交者による高麗への「進奉」が高麗の文書史料中に確認される一方、いわゆる初期倭寇が発生し、日麗間で交渉が行われている。この時期の「倭」の海賊について、かつては成語・歴史的概念として熟した段階ではないという理由から、14世紀以降の「倭寇」と同範疇には含めないとする見方もあったが[田中1982]、性格的な連続性に注目して、「初発期の倭寇」ととらえるべきであるという村井章介[1988]の見方が定着している。

「進奉」について、青山公亮[1955b]は、事実上の朝貢に等しい、日本の高麗通交全般にわたる形式ととらえた⁶。そして13世紀には高麗が通交を歓迎せずに交易を縮小する姿勢を示したため、倭寇が発生したとする[青山1955c]。

一方、森克己[1975d]は、鎌倉幕府が民間の自由な貿易を許した結果、前代以来の私献貿易が継承され、その対馬によって行われたものが「進奉」であるとする。そして高麗から日本商人が撤収するのといれかわりに倭寇が登場した点に注目する。その要因について森は、高麗の情勢不安のなかで武装商人が登場した結果である[森2008]とか、単に高麗の混乱に乗じたと記す場合[森2009cg]もあるが、具体的には、日麗両政府の統制力が弛緩するなか、12世紀はじめ壱岐でみられた海賊行為(高麗仏典を将来した商船が被害)の流れが12世紀半ば以降高麗にむかっていると説明し(1152年清原是包事件、13世紀の倭寇)、その主体として荘官武士に注目する[森1975c]。そして高麗は対馬を倭寇の発源地とみて禁圧を求めながら、日本とは友好関係を望んでいたことが漂流船送還の事例よりうかがえるとし

⁵ それゆえ、このころ成立したとみられる八関会の儀注に朝賀礼の参加者として日本が言及されない理由が、あらためて問題となるだろう。

⁶ 田中健夫[1975]も同様である。

た[森1975d]。

田村洋幸[1967]は、日麗間の経済格差のために11世紀末より日麗貿易が衰退したが、大宰府官吏をはじめとする地方の豪族は中央との対立にも関わらず貿易拡大を希求していたとする。そして彼らが高麗と交渉する契機となったのが、松浦や対馬の土豪が生活の必要からひきおこした倭寇事件であり、高麗は大宰少貳の武藤氏と交渉することで日本側の諸勢力をおさえこみ、武藤氏とは歳遣船による進奉形式の交易を行いつつ、これをできるだけ抑制する方向に調整したととらえる。これは、日本の高麗輸出品が高級品を中心とするのに対し、倭寇の略奪品が米穀など生活財であるとの理解から、商人と倭寇は表裏一体ではなく、階層的・地域的なちがいがあるとする氏の指摘につながる[田村1993]。ただし氏自身が指摘するように、交易主体そのものに階層性があったであろうことをふまえるならば、対馬・壱岐・松浦などでは、高麗における生活財の交易と掠奪行為とが表裏関係にあった可能性を想定できる。

さらに川添昭二[1975;1996]は、初期倭寇に対する日本側権力の対応について論及し、1226年に御家人武藤資頼が大宰少貳に就任して、鎌倉幕府の外交・貿易への関与がはじまったこと。それが可能となった背景には、朝廷側にも倭寇に起因する対外的危機意識があったこと。1245～46年ごろ、武藤氏の意をうけた被官の宗氏が対馬入りし、土豪の阿比留氏を討ったと伝えられることは、倭寇禁圧にも関わるであろうこと、などを指摘した。そして1263年に高麗を訪れた日本の「進奉」船は武藤氏の歳遣船であり、1227年の倭寇禁圧交渉を機に武藤氏が高麗と結んだ「修好互市」に始点があること。しかしその交易は、高麗の生産力の低さと商業の未発達に加え、倭寇への警戒感から、高麗側に抑制的ないし拒絶的な傾向が強かったこと、などを論じている。

大山喬平[1984]も、大宰府をおさえた武藤氏が進奉船により高麗と修好互市を行ったととらえ、朝廷の許可を得ずに遂行されたその倭寇対策は、幕府の外交・貿易権の掌握意志を示すものと位置づける。また佐伯弘次[1992]は、初期倭寇の主体を対馬や松浦の領主・民衆ととらえ、京人が日宋貿易への悪影響を懸念しながら日麗貿易については何ら言及しないのに対し、武藤氏が高麗の倭寇禁圧要請に積極的に対応して高麗貿易を推進したという違いに注目する。

一方、李領[1999]は、日本側の「進奉」は私的な商行為ではなく、恒常的で準公的な関係であり、その直接的な主体は対馬であったとする。そして高麗内部における進奉儀礼の整備過程を検討し、また11世紀末までは高麗と対馬との間に準公的な関係としての「進奉」はみだしがたいとして、12世紀の毅宗代にその始点を求めた。また「礼制」ともよばれるその制度化された関係には、大宰府も関与していたはずであり、さらにはその大宰府を管理する平氏政権や、その後の鎌倉幕府も背後にあって容認していたのではないかと推測する。

この李領説に対して、濱中昇[2000]は、高麗国内の“進奉儀礼”に関する理解、また日本側の主体が「進奉」を公的関係と認識していたかについて疑問を呈している。橋本雄[2002]も、李説を論証不足としつつ、むしろ非定例・不定期的な「進奉」、あるいは「進奉」の枠におさまらな「互市」の存在を重視すべきであると述べた。

「進奉」については、さらに山内晋次[2003a]が、11世紀以来の関係を背景としてこのころ対馬島司と高麗の間に生まれていた特殊な通交関係との見方を提示している。それは朝貢としての意味合いを

ふくみ、高麗側では対馬に対して耽羅と同様な外臣としての位置づけをあたえていたのではないかとする。

そのほか田中健夫[1961]は、初期倭寇の発生背景として、モンゴルの侵攻に忙殺された高麗側の通交拒否をあげる。また溝川晃司[2003]は、13世紀初には対馬と玄界灘他地域との間に高麗への「進奉」をめぐる対立があり、くわえて日本側に非礼があつて交易が途絶したため、これを死活問題とする対馬が倭寇を起し、その不満を解決するために武藤氏が「進奉」再開を要請したとみる⁷。

以上のように、「進奉」をめぐっては、関係する日本側の主体、前代の貿易との連続性、制度・慣例としての性格をどのようにとらえるかにより、見解がわかる。近年では主体を対馬とみる傾向が強く、大宰府の関与や認知も推測されているが、これらは個別の事件からうかがわれる状況を一般化した議論といえる。本来「進奉」とは“下”から“上”に対する進献を意味する一般的な用語であり、当時は中国でも通用していた。日麗関係に関する用語としては、13世紀にのみ確認されるので、一見、この時期に特有な現象であるかにもおもえる。しかし、これらの用例は、いずれも高麗の外交文書中にみられるのに対し、12世紀以前の日本からの物品“献上”に関する史料は、二次的な編纂記録にかぎられ、同時代の一次史料ないしこれに準ずる史料が残されていない。そこで現時点では、「進奉」という語が12世紀以前の朝貢形式をとる日麗貿易でも広く用いられた一般的な術語であり、主体の範囲や形式内容が時期ごとに変遷していった可能性を想定しておく必要もあるだろう。また当時の日麗貿易の形態を「進奉」に限定してよいかという橋本の指摘も、制度の枠組みだけではとらえきれない通交の実態把握にむけた提言として傾聴すべきである。

一方、初期倭寇については、上記のごとく多くの場合、「進奉」問題との関連において言及されるが、比較的史料の多い個別の事件を中心に論じられる場合、関心が対馬に集中する傾向もある。しかし、壱岐・松浦など九州北部地域の社会に広く素地があつたこと。また社会の流動化という事態は同時期に朝鮮半島の南部沿岸地域でも起こっていたこと(海賊の存在、いわゆる「南賊」の蜂起、流民の発生)をふまえ、日麗双方における対馬海峡沿岸地域社会の不安定化という巨視的な観点から全体像を把握する必要があるだろう。

また個別史料のいっそう精緻な分析が必要である。とりわけ日朝双方の文献に録文の形で残された高麗の外交文書が注目されるが、その全文を丹念に読み解く基礎作業は、必ずしも十全ではない。大宰府に倭寇禁圧を求めた1227年の高麗全羅道按察使の牒を分析した近藤剛[2008]の仕事は、数少ない成果のひとつである。ここでは文書史料の詳細な読解を土台として、高麗が大宰府に対して直接交渉を行ったのは倭寇の主体が対馬の官民一体と判断されたためであり、また高麗側ではこのとき二度にわたって使者を派遣したと指摘する⁸。

⁷ このほか、初期倭寇に言及した論考として杉浦1964がある。

⁸ その他の文書史料に関しては、五島青方文書中の倭寇関係史料を紹介した長沼1976、初期倭寇問題との関連が推測される紙背文書をとりあげた田島2001もある。

7. 課題と展望

10世紀～13世紀前半の日麗関係史に関する研究は、絶対的な史料不足のため、今後劇的な発展を期待しがたいのが実情であろう。しかし、そのわずかな史料でさえ、丹念かつ全面的に読解されていないものが少なからず存在する。それはとりわけ日本側に残された史料において顕著である。

また気にかかるのは、日本史・朝鮮史という研究分野の区分が自明の前提となりがちな学界の現状を背景として、日本史研究者の高麗史に関する理解、朝鮮史研究者の日本史に関する理解に、どうしても不十分さが目につく点である。日麗関係史そのものを研究対象とするうえで、かかる限界は史料読解能力のレベルから改善されることが望ましい。幸い、こうした“壁”を乗り越えようという機運は日韓双方でめばえつつある。それが果たされてはじめて、朝鮮半島と日本列島のトータルな歴史状況のなかに、日麗関係の事象をより具体的に位置づけることが可能となるだろう。

さらに近年の研究を通じて明らかになってきたのは、東方ユーラシア規模の視野の重要性である。さきに日麗関係は日宋関係に対して付随的にあつかわれることが多いと批判したが、それが問題視されるのは、かかる状況が日麗関係史に対する関心と理解度の低さと結びついている場合である。日麗関係を本格的に追究するならば、むしろ、宋、高麗、日本、契丹、女真、モンゴル、西夏、東南アジア諸国など諸民族・諸国家がおりなす当時の東方ユーラシアの全般的動向に注意しながら、そこに日麗関係を相対的に位置づけていく必要がある。

また一方、現代的な感覚における「日本」や「韓国」といった国家・民族の線引きとは必ずしも整合しない、当時の境界地帯のローカルな社会状況に、さらに徹底的にこだわってゆく必要がある（たとえば港町、対馬海峡沿岸地域、海商や宗教者のネットワーク／コミュニティへの着眼）。私見では、日麗通交の史料不足は、日朝とも中央・支配層の記録では光があたりにくい、こうした部分の重要性をかねて強く示唆しており、その解明が日麗間の交易や海賊事件の本質理解につながるものとする。

■文献一覧

※初出時のタイトルが異なるものや、複数の初出論文を1つに合編したものもあるが、いずれも原題は省略している。

【日本語】

- 青山公亮 1955: 『日麗交渉史の研究』明治大学文学部
- 青山公亮 1955a: 「高麗よりの来牒に対する日本政府の態度」青山1955／初出1934: 『台湾教育』昭和9年1月号
- 青山公亮 1955b: 「通商関係の一斑」青山1955／初出1925: 『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』岩波書店
- 青山公亮 1955c: 「高宗朝及び元宗朝に於ける彼我の葛藤」青山1955／初出1927: 『史学雑誌』38-4
- 生田滋 1991: 「新羅の海賊」『日本海と出雲世界—海と列島文化2』小学館
- 池内宏 1934: 『刀伊の入寇及び元寇』(岩波講座日本歴史)岩波書店
- 池内宏 1979: 「刀伊の賊—日本海に於ける海賊の横行」同著『満鮮史研究』中世1、吉川弘文館(復刻版)／初版1933: 岡書院／初出1926: 『史林』10-4
- 石井正敏 1987: 「日本と高麗」日本アート・センター編『海外視点日本歴史5 平安文化の開花』ぎょうせい
- 石井正敏 1988: 「九世紀の日本・唐・新羅三国間貿易について」『歴史と地理』394
- 石井正敏 2000: 「日本・高麗関係に関する一考察—長徳3年(997)の高麗来襲説をめぐって」中央大学人文科学研究所編『アジア史における法と国家』中央大学出版部
- 石井正敏 2001: 「寛平六年の遣唐使計画と新羅の海賊」『アジア遊学』26
- 石井正敏 2006: 「『小右記』所載「内蔵石女等申文」にみえる高麗の兵船について」『朝鮮学報』198
- 石井正敏・川越泰博(編) 1996: 『増補改訂 日中・日朝関係研究文献目録』国書刊行会
- 石上英一 1982: 「日本古代10世紀の外交」井上光貞他編『東アジアにおける日本古代史講座7—東アジア世界の変貌』学生社
- 稲葉岩吉 1934: 『日麗関係』(岩波講座日本歴史)岩波書店
- 榎本涉 2007a: 「宋代の「日本商人」の再検討」同著『東アジア海域と日中交流—9～14世紀』吉川弘文館／初出2001: 『史学雑誌』110-2
- 榎本涉 2007b: 「新羅海商と唐海商」佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社
- 榎本涉 2008: 「日宋・日元交通における高麗—仏教史料を素材として」『中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究』平成15～19年度科学研究費補助金研究成果報告書(特定領域研究・特別研究促進費)村井章介
- 大屋徳城 1988a: 「寧楽仏教と高麗朝の仏教」同著『仏教史の諸問題』(大屋徳城著作選集6)国書

- 刊行会／初出1939:『宗教研究』102
- 大屋徳城 1988b:『高麗統蔵経雕蔵攷』(大屋徳城著作選集7)国書刊行会(復刻)／初版1937: 便利堂
- 大山喬平 1984:「中世の日本と東アジア」歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史3—中世1』東京大学出版会
- 奥村周司 1979:「高麗における八関会的秩序と国際環境」『朝鮮史研究会論文集』16
- 奥村周司 1982:「高麗の外交姿勢と国家意識—『仲冬八関会儀』および『迎北朝詔使儀』を中心として」『歴史学研究』別冊特集(民衆の生活・文化と変革主体)
- 奥村周司 1985:「医師要請事件にみる高麗文宗朝の対日姿勢」『朝鮮学報』117
- 門田見啓子 1985:「大宰府の府老について(上)—在庁官人制における」『九州史学』84
- 上川通夫 2007:「中世仏教と「日本国」」同著『日本中世仏教形成史論』校倉書房／初出2001:『日本史研究』463
- 亀井明德 1995:「日宋貿易関係の展開」『岩波講座日本通史6—古代5』岩波書店
- 蒲生京子 1979:「新羅末期の張保阜の台頭と反乱」『朝鮮史研究会論文集』16
- 川添昭二 1975:「鎌倉時代の対外関係と文物の移入」『岩波講座日本歴史6—中世2』岩波書店
- 川添昭二 1988:「鎌倉初期の対外関係と博多」箭内健次編『鎖国日本と国際交流』上、吉川弘文館
- 川添昭二 1996:「中世における日本と東アジア」同著『対外関係の史的展開』文献出版／初出1992,1994:『福岡大学総合研究所報』147,156
- 小峯和明 2006:『院政期文学論』笠間書院
- 小峯和明 2006a:「大江匡房の高麗返牒—述作と自讃」小峯2006／初出1981:『中世文学研究』7
- 小峯和明 2006b:「『対馬貢銀記』の世界—異文化交流と地政学」小峯2006
- 近藤剛 2008:「嘉祿・安貞期(高麗高宗代)の日本・高麗交渉について」『朝鮮学報』207
- 近藤剛 2009:「泰和六年(元久三・一二〇六)対馬島宛高麗牒状にみえる「廉察使」について」『中央史学』32
- 佐伯弘次 1990:「国境の中世交渉史」『海と列島文化3—玄界灘の島々』小学館
- 佐伯弘次 1992:「海賊論」荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史Ⅲ—海上の道』東京大学出版会
- 杉浦亮治 1964:「アジアの中世—倭寇禁圧使節を通しての日麗関係」『歴史研究』12(愛知学芸大)
- 対外関係史総合年表編集委員会(編) 1999:『対外関係史総合年表』吉川弘文館
- 高橋昌明 2007:『平清盛 福原の夢』講談社
- 武田幸男(編訳) 2005:『高麗史日本伝—朝鮮正史日本伝2』(上/下)岩波書店
- 田島公 1991:「海外との交渉」橋本義彦編『古文書の語る日本史2—平安』筑摩書房
- 田島公 2001:「冷泉家旧蔵本『長秋記』紙背文書に見える「高麗」・「渤海」・「東丹国」」上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館
- 田中健夫 1961:『倭寇と勘合貿易』至文堂
- 田中健夫 1975:「十四世紀以前における東アジア諸国との関係」同著『中世対外関係史』東京大学

出版会

- 田中健夫 1982: 『倭寇一海の歴史』教育社
- 田村洋幸 1967: 『中世日朝貿易の研究』三和書房
- 田村洋幸 1993: 「高麗における倭寇濫觴期以前の日麗通交」『経済経営論集』28-1
- 長沼賢海 1976: 「元寇と松浦党」同著『日本海事史研究』九州大学出版会／初出1933: 『史淵』7
- 中村栄孝 1965: 「後百済王および高麗太祖の日本通使」同著『日鮮関係史の研究』上、吉川弘文館
／初出1927: 『史学雑誌』38-8
- 南基鶴 2003: 「高麗と日本の相互認識」(村井章介訳)『グローバル化の歴史的前提に関する学際的研究』平成12～14年度科学研究費補助金研究成果報告書(基盤研究A2) 荒野泰典／原載
2000: 『日本歴史研究』11
- 橋本雄 2002: 「書評:『倭寇と日麗関係史』」『歴史学研究』758
- 濱田耕策 2002: 「王権と海上勢力—特に張保臯の清海鎮と海賊に関連して」同著『新羅国史の研究—東アジア史の視点から』吉川弘文館／初出1999: 唐代史研究会編『東アジア史における国家と地域』刀水書房
- 濱中昇 2000: 「書評:李領著『倭寇と日麗関係史』」『歴史評論』603
- 原美和子 1999: 「宋代東アジアにおける海商の仲間関係と情報網」『歴史評論』592
- 原美和子 2002: 「勝尾寺縁起に見える宋海商について」『学習院史学』40
- 原美和子 2006: 「宋代海商の活動に関する一試論」小野正敏・五味文彦・萩原三雄編『中世の対外交流—場・ひと・技術』高志書院
- 保立道久 2004: 「院政期の国際関係と東アジア仏教史—上川通夫・横内裕人両氏の仕事にふれて」同著『歴史学をみつめ直す』校倉書房
- 堀池春峰 1980: 「高麗版輸入の—様相と観世音寺」同著『南都仏教史の研究』上、法蔵館／初出1957: 『古代学』6-2
- 三浦圭一 1993: 「十世紀—十三世紀の東アジア」同著『日本中世の地域と社会』思文閣出版／初出1970: 『講座日本史』2、東京大学出版会
- 溝川晃司 2003: 「日麗関係の変質過程—関係悪化の経緯とその要因」『国際日本学』1
- 村井章介 1988: 「倭寇と朝鮮」同著『アジアのなかの中世日本』校倉書房／初出1986: 藤維藻他編『東アジア世界史探究』汲古書院
- 村井章介 1996: 「1019年の女真海賊と高麗・日本」『朝鮮文化研究』3
- 森克己 1975: 『続々日宋貿易の研究—森克己著作選集第3巻』国書刊行会
- 森克己 1975a: 「日本商船の高麗・宋への進出の端緒」森1975／初出1963: 『中央大学文学部紀要』33
- 森克己 1975b: 「日・宋と高麗との私献貿易」森1975／初出1959: 『朝鮮学報』14
- 森克己 1975c: 「日宋麗交渉と倭寇の発生」森1975／初出1965: 『石田博士頌寿記念東洋史論叢』石田博士古稀記念事業会
- 森克己 1975d: 「鎌倉時代の日麗交渉」森1975／初出1965: 『朝鮮学報』34

- 森克己 2008: 「我が能動的貿易の展開」同著『新訂日宋貿易の研究—新編森克己著作集1』勉誠出版／新訂再版1975: 国書刊行会／初版1948: 国立書院
- 森克己 2009: 『続日宋貿易の研究—新編森克己著作集2』勉誠出版／初版1975: 国書刊行会
- 森克己 2009a: 「海路による東方貿易の展開」森2009／初出1969: 『東洋学術研究』8-3
- 森克己 2009b: 「日宋交通と海洋の自然的制約」森2009／初出1937: 『歴史教育』12-5
- 森克己 2009c: 「日宋交渉の発展過程」森2009／初出1963: 『歴史教育』11-9
- 森克己 2009d: 「日宋貿易に活躍した人々」森2009／初出1964: 日本歴史学会編『歴史と人物』吉川弘文館
- 森克己 2009e: 「日本・高麗来航の宋商人」森2009／初出1956: 『朝鮮学報』9
- 森克己 2009f: 「日宋交通と耽羅」森2009／初出1961: 『朝鮮学報』21・22
- 森克己 2009g: 「日宋麗連鎖関係の展開」森2009／初出1949: 『史淵』41
- 森克己 2009h: 「日麗交渉と刀伊賊の来寇」森2009／初出1966: 『朝鮮学報』37・38
- 森公章 2008: 「古代日麗関係の形成と展開」『海南史学』46
- 森平雅彦 2007: 「朝鮮における王朝の自尊意識と国際関係—高麗の事例を中心に」『九州大学21世紀COEプログラム「東アジアと日本: 交流と変容」統括ワークショップ報告書』
- 森平雅彦 2008: 「日麗貿易」大庭康時他編『中世都市・博多を掘る』海鳥社
- 森平雅彦 2009: 「13世紀前半における麗蒙交渉の一断面—モンゴル官人との往復文書をめぐって」한일문화교류기금・동북아역사재단編『몽골의 고려・일본 침공과 한일관계』景仁文化社
- 山内晋次 2003: 『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館
- 山内晋次 2003a: 「朝鮮半島漂流民の送還をめぐって」山内2003／初出1990: 『歴史科学』122
- 山内晋次 2003b: 「九世紀東アジアにおける民衆の移動と交流—寇賊・叛乱をおもな素材として」山内2003／初出1996: 『歴史評論』555
- 山内晋次 2003c: 「荘園内密貿易説に関する疑問」山内2003／初出1989: 『歴史科学』117、および1994: 『貿易陶磁研究』14
- 山内晋次 2003d: 「東アジア・東南アジア海域における海商と国家」山内2003／初出1996: 『歴史学研究』681、および1998: 『新しい歴史学のために』230・231
- 山崎雅稔 2001a: 「承和の変と大宰大貳藤原衛四条起請」『歴史学研究』751
- 山崎雅稔 2001b: 「九世紀日本の対外交易」『アジア遊学』26
- 横内裕人 2008a: 「高麗統藏経と中世日本—院政期の東アジア世界観」同著『日本中世の仏教と東アジア』塙書房／初出2002: 『仏教史学研究』45-1
- 横内裕人 2008b: 「遼・高麗と日本仏教—研究史をめぐって」『東アジアの古代文化』136
- 李成市 1997: 『東アジアの王権と交易—正倉院の宝物がきたもうひとつの道』青木書店
- 李炳魯 1993: 「九世紀における「環シナ海貿易圏」の考察—張保臯と対日交易を中心に」『神戸大学史学年報』8
- 李領 1999: 『倭寇と日麗関係史』東京大学出版会
- 李領 1999a: 「院政期の日本・高麗交流に関する一考察」李領1999

李領 1999b: 「中世前期の日本と高麗—進奉関係を中心として」李領1999／初出1995: 『地域文化研究』8

渡邊誠 2003: 「承和・貞観期の貿易政策と大宰府」『ヒストリア』184

渡邊誠 2007: 「平安貴族の対外意識と異国牒状問題」『歴史学研究』823

【韓国語】

김기섭他(編) 2005: 『일본 고중세 문헌 속의 한일관계사료집성』혜안

金徳原 2006: 『韓国中世日本史料集成』景仁文化社

李鎮漢 2005: 「高麗前期 對外貿易과 그 政策」『韓国研究センター年報』5(九州大)

盧明鎬 1997: 「東明王篇과 李奎報의 多元的 天下觀」『震檀學報』83

盧明鎬 1999: 「高麗時代의 多元的天下觀과 海東天子」『韓国史研究』105

張東翼 2004: 『日本古中世高麗資料研究』서울대학교출판부